

日韓国際舞踊学会 シンポジウム開催に学ぶ

舞踊学会会長 若松 美黄

I. 事前交渉

舞踊学会では、2000年4月、国際交流プロジェクトを活動計画に盛り込み、若松美黄、石黒節子、尼ヶ崎彬、古井戸秀夫、橋本裕之、丸茂祐佳の委員が担当することになった。この企画は、松本千代栄会長時代からの懸案であった。

学会を海外と交流することを検討し、FIFAもあることなので、まず韓国の可能性を最初に考えた。韓国の舞踊学会関連組織は、6つあるが、例年、紀要を発行していること、分野が広範な舞踊を含むこと、活動が顕著であること、などの条件で、検討を重ねた。結果として未来舞踊学会が第一候補となり、同年6月、宋会長が来日した折に、宿泊先の帝国ホテルに伺い、第一回目の話し合いを行った。

宋会長は、日本語の読み書きが出来ないが、会話はこなせ、ご主人は、実業家、家族はアメリカに住み、英語は堪能で、私とは、色々な国際舞踊シンポジウムで、交流を持っていた。検討課題は9項目あり、筆者が、日英二ヶ国語で合意文書を作成、会談後、日本側で、それぞれの国の委員会でも検討することとなった。9項目は下記の内容であった。

1. 期間・日時—2001年・2002年6月頃、FIFAの期間に合わせ2日程度。助成金を得やすい形式で。
2. 場所—韓国・日本で行う
3. 主催国が当該の国際舞踊シンポジウムの費用を負担する
4. それぞれの国から60名程度が参加することを前提とする。日程、会場、交通費、宿泊設備、諸費用等の調査をそれぞれ行う
5. 研究者の研究発表を中心とし、シンポジウム、ワークショップは、母国語で、同時訳をプロジェクトで流す等の企画を練る
6. 作業担当者をそれぞれの国から出し、個別に交渉する
7. プロシーディングは、開会前刊行。通訳の費用、同時通訳の可能性の検討
8. 日程のタイムテーブル（2日間）案の作成
9. 連絡方法の確認、次会の会議予定

同年7月21日、日本側では、上記案を検討し、下記の案が追加された。

1. 若手研究発表は、母国語あるいは英語
2. 主催者は早めに英文の abstract を相手国に渡

す

3. 質疑は通訳をつける
4. 発表は、プロジェクト等で翻訳する
5. 研究発表者は、それぞれの国から10名程度
6. シンポジウムのテーマは、Transgrace, Trance, Tradition の3 Tが提案され、韓国側に日本側の意向を伝えた

2000年10-12月、筆者は、Galili 舞踊団とのプロジェクトで、オランダ各地を巡業し、その間も、韓国とメール、ファックス、電話のやり取りが続けられ、特に不自由もなく、まさにインターネット時代の利点を活用した。

II. 第1回国際舞踊シンポジウム：2001年

正月までには、2001年5月25-27日の日程が決まり、abstract 審査を経た日本側の9組の論文発表予定者を定めた。研究発表者の枠組みは、25日15-17時：日本3組、26日10-12時：6組、シンポジウムは、26日15-17時とするタイムテーブルが決まった。会場は、檀国大学を予定したが、韓国側シンポジウム発表者が未定、日本歓迎のショーケースは出来ないとのことで、25-27日にソウルで行われる現代舞踊・バレエ・民族舞踊公演などの予告を連絡してくれた。

2001年1月19日、宋会長の訪日にともない、5回目の日韓会議が、帝国ホテルで行われた。韓国側の意向で韓国での英文表記とシンポジウムの人選、担当者、タイムテーブル案などが検討された。

総タイトルは、Harmony with Dance and Tradition in the Twenty First Century-The First Korea and Japan Dance Research Symposium-

運営担当に金泰源、崔清子、金貞秀、安炳淳の名前を頂いた。

2月28日、常務理事会を経て、日本側の一般参加者を募ることとなった。日本側の旅行社が25日9時成田発、27日5時ソウル発。飛行機・ホテル（ブジョンホテル、二人一部屋）朝食込みで65000円の企画でバックを組んだ。

この段階で、日本側は論文発表8組となり、また同時に、翌年の2002年は、関西での予定が企画された。

韓国の会場が世宗大学に最終決定されたのは、4月だった。紀要の翻訳は、主としてKim Sung-Soo氏のグループに委嘱し、一部をHyun Hee Jung会員が行った。原稿送付は、すべてインターネットを介したため、原稿は、ほとんど即日に、印刷可能だった。

5月20日、韓国から至急電話あり、27日、午前中に親睦を兼ねたデモンストレーションを行いたいので、参加して欲しいという依頼があった。国際会議でよく行う、ブツケ本番のパーティ版

ショーケースである。

第1回・韓国日本国際舞踊シンポジウムは、2001年5月25-26日、追加親善公演27日、日本側約70名の参加を得て、世宗大学のユーティリティ舞踊施設で行われた。事前に定めてあった事務的な処理、細部の連絡事項、またシンポジウム担当者の変更（橋本氏は、所用で不参加、代わりに吉川周平氏が委嘱され、鄭炳浩、許順仙氏らが加わった）そして、言葉の壁などが、重なって、いくらかの混乱はあったが、第一回目の運営としては、順調な水準と言える。

ともかく韓国側では、誠意を持って接してくれたと思う。ドリンク無料、昼食券の無料サービス、写真ビデオは、プロフェッショナルな会社に依頼するなどの心遣いが見られた。夜は国際現代舞踊フェスティバル等に希望者を招待していただき、公演も面白かった。研究発表については、日韓の習慣の差異や、言葉の壁が検討事項となった。シンポジウムについても、当然、成果もあったが、検討すべき宿題ともなった。

Ⅲ. 第2回国際舞踊シンポジウム：2002年

まず、研究発表は英語で行う。但し質疑は母国語で行い、通訳をつける。日本では韓国のようなショーケースはハードの上で難しい、などが理事会で検討された。やがて、日程はFIFAの一週間後の7月6-7日、鈴木 晶教授の助力を得て、会場に法政大学ポアソナルスカイホールが決定

された。交通の便が良く、しかも国際会議を前提とした設備がそろう、東京を一望に収め、足下に靖国神社を見下ろすという、絶好の場所である。

国際学会では、通常、事前に英文の発表論文集を作る。原稿は、メールを介してやりとりすればよい。デスクトップ上での編集は、簡単である。そこで、筆者が、窓口となり原稿を集めた。しかし、今回の論文発表者の、二割程度の人を除いて、やりとりが発展途上な様子が分かった。韓国からは、何度か原稿を受けたが、読めないものが多く出た。韓国語の言語が基盤となるコンピュータから送る場合、まずfileのタイトルが韓国語では、受け取れないことにもなる。日本側では、問題ないはずだが、半数の方々が不慣れで、フロッピーで送る方もいた。もうCD-RWなので、古い機種で無いと、フロッピーは使えない。ソフトには、英文のミスタイプ、文章チェックもあるはずだが、間違いも散見した。また、原稿直しのオーダーも数多くあった。校正の場所を探して、数文字打ち込むくらいなら、fileごとの取替えの方が、簡単だ。遅ればせながら、舞踊学会最初のインターネットから資料をCD-RWに納め、次に松澤慶信先生と編集を完成しプロシーディングを事前に完成した。

英・日・韓の三ヶ国語でプログラムをプリントし、2002年7月6日の朝から会場作り、床には、絨毯の上にリノリウムを乗せ、コンピュータ調整は、前日、韓国の宿舎にコネクターを持参し、



第1回 日韓合同大会にて (2001.5)

打ち合わせた。フロッピーあり、CD-R あり、メモリースティックありに、機材を対応させ、開会にいった。

開会式会場は、正面に英文のバーナーを吊るし、背面の幕をあけると、広大なガラス張りで、靖国神社を足元に見下ろしながら、真夏の東京のパノラマが見える。絶景。参加者の驚嘆とともに、それぞれの会長挨拶に続き、松本千代栄名誉会長は英語で、LEE SOON YEOL 韓国顧問は日本語で、会場校の鈴木晶教授、事務局の丸茂祐佳助教は、韓国語を交え、日英韓語が飛び交い、施設の素晴らしさもあって、国際シンポジウムの雰囲気が醸し出された。

英文研究発表に次ぐ質疑は、日韓両国語の通訳をつけたが、多くが power point を使いながら、あまり図表を多用しなかったのは、安全策のためであろうか？英語という縛りが、かえって簡潔な要約に向かわず、国際会議の paper reading は、今後とも場慣れが必要と思われた。15時半から韓国のダンスパフォーマンスが観られた。全グループが FIFA でそれぞれの都市での開会式のイベントに登場した経験がある優秀な方々だという。傾向としては、伝統舞踊が主流だった。

日韓親善パーティまで時間があり、韓国舞踊の肩の動きについて、質疑を行い、小さなレクデモが即座に繰り広げられるなど、良い交流の場となった。

親善パーティは、尼ヶ崎嶺常務理事の司会により、鏡割りで樽酒を酌み交わし、国際色のある交流が行われ、記念写真で終わった。

7日は、10時から論文発表。特筆すべきは、韓国側が朝から全員出席し、論文発表に参加したことだ。国際感覚では、自分の発表が終わり退席してしまうのは失礼なことである。日本人研究者は、自己の発表後、他の人の発表を聞き、質疑などに加わる習慣を確立していない。今後の課題である。

13:30分からのシンポジウムには、韓国側会長・人間無形文化財の宋寿男博士が、透明感のある舞を披露した。CHUNG BYONG HO 教授の基調報告は、貴重な資料を駆使して興味深かったが、通訳付きの情熱的な話をさえぎる交通整理など、国際間の難しさは、さらなる研究課題となった。

3時からは、石黒節子担当理事構成の日本側のパフォーマンスがあり、韓国服の李七女会員の通訳を交え、加藤みや子、馬場ひかり、志賀山葵、又吉静枝会員らプロの芸と「よさこいソーラン」グループの熱演で、もりあがり、最後には参加者も踊りに加わって、踊る閉会となった。

法政大学の越部清美講師を初め、若いボランティアの手で、会場設営・撤去などが、迅速に処理され、気持ち良かった。

1. 日本の舞踊学会にも英文発表の応募が、常時、10篇程度見込め、若い方々が、国際感覚に対応しつつあるらしいことは、明らかになった。国際間でコミュニケーションするには、英語を使用するよりなく、学会としては、今後とも、ある程度のエネルギーを割かななくてはならないだろう。
2. 国際会議では、分かりやすいことは必要である。簡潔な要旨と論理的考察を、英語の不得意な人々にも分かるようにしたい。かなりの発表者の発音は、聞き取りにくく、もっと、はっきり発音して欲しかった。
3. 国際会議では、コンピュータが大きな役割を担い、最低 power point 程度の操作に慣れておきたい。コネクター、動画の再生などの容量の検討など、事前にチェックが必要である。原稿や写真など、即時にネットで送付できる時代であるが、現実的に、さらに慣れる必要がある。
4. 外国との交渉は、相互理解のための時間と辛抱が必要である。しかも、金銭的な問題がともなうので、交渉する人に、ある余裕をあたえなくてはならない。また、交渉は、言葉を越えて、人間性が伝わる。私の理解する限り、国際感覚に慣れることとは、日本人同士の時以上に、誠実さが求められる。
5. ログスからホロスへと地球規模の大変革が押し寄せている時代であろう。舞踊の知恵が、ますます社会に求められている。多様な立場の人々が、協力し合って、舞踊学を中心とした新たな、総合的な学を発展させ、公演活動を含めて、大きな輪を広げたいと願っている。

二年にわたる日韓合同舞踊学会には、大勢の人々の誠意あるご協力を頂いた。感謝を述べるとともに、これを今後の発展に資するものとしたい。